

中越地方の悲しみ たなか踏基

「これは大きいゾ！」平成十六年十月二三日午後5時56分、私は自宅居間で夕飯前の一時、TVを観ながら寛いで居た。部屋全体が大きく揺れ、その揺れが暫く止まらなかった。家内は悲鳴を上げて、慌ててガスの元栓を締めた。TV画面のテロップが震源と震度を伝えた。新潟県長岡・小千谷付近、震度M(マグニチュード)6・8、震源の深さは約20キロの活断層直下型であると・・津波の心配はありません」が繰返された。とつさに四十年前の新潟地震の記憶が甦り、埼玉震度4、中越地方震度6強か！さぞ被害甚大であろうと直感した。実は私は、青春時代を四年間過ごした新潟の地で、歴史に残る天災に三度遭遇している。大学受験の昭和36年豪雪、戦後最大の風雪災害と言われた昭和38年一月豪雪、粟島南方沖を震源とする震度M7・5の昭和39年新潟地震である。とりわけ後2つの天災は、私の貧乏寮生活の想い出と重なっていて忘れられない。

昭和38年の通称サンパチ豪雪は、中越地方を一挙に陸の孤島に追込んだ。大晦日から降り始めた白い悪魔の跳梁で、全交通網は壊滅し、災害救助法が発令、自衛隊の初出勤となった。一晩で2mも積もる雪が一週間近く続き、列車は不通、国道も通行止め、融雪パイプも役立たず、街中の道は雪で家の二階と同じ高さとなり、学部長の檄文要請により、雪の重みで潰れそうな校舎の屋根の雪降ろしを必死でした経験である。後に執筆の「埋葬」はこの時の体験を描いた作品である。

昭和39年6月16日の新潟地震の時は、長岡に居た。卒業研究の実験装置が壊れ、床に薬品が

散乱し後始末に奔走した。電気・水道・ガスが止まり(ライフラインの表現は当時無かった)寮の食事が無く飢えていた記憶がある。新潟県沿岸の津波高は4mに達し、信濃川を遡り一部で氾濫市内を水浸しにした。古い万代橋は壊れず残り、国体に合せて新設の昭和大桥は無残に崩壊、昭和石油のタンク火災の黒煙は、新潟の空を30日余りに渡って覆った。各地で顕著な液状化現象がみられ、鉄筋コンクリート造りの基礎杭やコンクリートの耐震性不備が露呈し、建築基準法改正、地震防災対策に教訓を与えた。新潟地震は、防災対策を見直す契機となったようである。

平成十六年その夜が「新潟中越地震」の始まりであった。通信回線の故障のためか、TV報道は余震頻度のみ強調した。初動対応に遅れもあって、被害は軽微であるかの錯角で人々は眠りに付いた。翌朝目覚めて、日本中が驚愕するのである。TV画面から放映される惨状に慄然とし、恐怖に震える被災者を目の当りにするや、人々は予測の付かない暗澹たる気持ちにさせられた。直下型として記憶に新しい平成7年「兵庫県南部地震」通称阪神・淡路大震災を超える規模だと報道されたからだ。開業以来大事故皆無の、JR東日本の新幹線8輻編成「とき325号」の、浦佐、長岡駅間脱線事故も報じていた。幸い死傷者が一人もいなかったのは不幸中の幸いであったが、安全技術の粋を誇る高速鉄道ですらトンネル・橋脚に深刻なダメージを被ったのである。全面復旧は余震で捗らずゆくに工事は、一ヶ月を要すると言われている。

「可哀想に！これからの寒さの季節に、また豪雪が残った家屋に追撃を掛けるであろう」

私は、長岡のサンパチ豪雪の体験から、画面から伝わる災害の大きさに震撼させられた。冬に向

けて始まる地方独特の白魔の恐怖感で不安に慄き、いた堪れない気分の罹災者の心情が、痛いほど理解できた。確かに、全体の死者の数こそ37名と少なかったものの、ズタズタ状態の壊滅的道路と倒壊家屋、山古志村等山間僻地の集落全体を孤立させ、なお襲う地滑りの恐怖は、村民全員が家財と動物を捨て、ヘリコプターで避難という未曾有の救済脱出劇を演出していた。人口約二千名、3mの豪雪地帯にある山古志村は、NHK朝の連続TVドラマ「こころ」でも紹介され、美しい棚田と錦鯉や闘牛の過疎の村だが、村全体がこの先も存続できるかどうかは不明である。避難指示を速やかに発令し、全村脱出を決断し村長自ら陣頭指揮を執った長島忠美氏の言葉に悲しくも胸打たれる思いがする。「全村避難は本当に悔しい。必ず戻ってもう一度緑豊かな故郷にしたい」・・・と。

そんな中、信濃川沿いに起こった巨岩に覆われる滑落現場から2歳の命の救出劇は、限界を超えた奇跡の生還と言うべき快挙であった。ライブ中継は、どんな迫真の演技ドラマも叶わない迫力で人々を感激させた。ハイパーレスキュー隊の電磁波人命探査装置「シリウス」の威力と、余震の危険も顧みず続けられた長時間ドラマを、日本中が固唾を呑んで見守った。母子三人揃った救出を念じたが、それは叶わなかった。生と死を偶然分けた関係者の切ない想いが、信濃川の対岸の投光ライトに浮かんで消えた。救出劇が一服の幸剤を人々に運んだのは確かなのだが、何故か私には、画面に映る路傍の標語「この町は君の住む町創る町」が、新潟中越地方の背負う宿命的な深い悲しみを物語ったような気がしてならなかった。

了